

校長室通信

令和7年3月28日号
志免町立志免西小学校
高良 祐治

令和6年度が終わろうとしています。3月14日(金)に第151回卒業証書授与式が行われ、180名の子どもたちが本校を巣立っていきました。また、3月24日(月)には、修了式が行われ、1年生から5年生の子どもたちは本年度の教育課程のすべてを修了したことを認める修了証(通知表の裏表紙に記載)を受け取り、この1年間の自身の伸びを確認しました。保護者や地域の皆様には、本校の教育活動にたくさんのご理解とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

さて、夏休みや冬休みと違って、春休みを挟んで、進学や進級という大きな変化を伴うこの季節は、子どもたちにとって期待や不安が入り交じる特別な時期でもあります。

学級編成(クラス替え)の意味

子どもたちにとって令和7年度がスタートする4月7日は、学級編成から始まります。誰と一緒にするのか、どんな人たちが同じクラスにいるのか、子どもたちにとっては大きな緊張の中で迎える年度始めです。

平成の中頃までは、学級編成は2年に1回でした。偶数学年に進級するときは、いわゆる“持ち上がり”と言われ、同じメンバーのまま、担任も異動等がなければ殆ど同じ担任のままでした。このため我々教師も、「2年間で子どもを育てる」という意識が強かったように思います。

ところが、いじめや不登校の増加など、時代背景の変化に伴い、毎年4月の始業式の日、全学年で学級編成が行われることが当たり前の風景になり、担任も1年単位で替わっていくことが普通になりました。私たちの意識も「1年間でどこまで学級としての高まりを目指すか」「1年間で子どもを育てる」という意識に変わってきました。

このように形は少しずつ変わってきた学級編成ですが、児童期の子どもたちの人格形成にはとても大きな意義があると考えています。

「人間は社会的動物である」と言われていますが、決まった小集団の中だけで過ごすことを基本としている他の動物と違って、人間は、家族のような永く同じ関係を保つ小さな集団をはじめ、様々な大小の集団と関わり合いながら自分の立ち位置を探り、多くの人々や社会と関わって生きていきます。それは、SNS等画面の中だけのつながりではなく、現実世界の同じ空間で、一人一人との関係性を意識しながら少しずつ“社会人”となっていくことが求められます。

こう考えると、毎年4月に行われるこの学級編成は、

この発達段階の子どもたちにとって、とても大きな意味があると思います。

親の心配をよそに

4月当初は、はじめて同じ学級になった人にどのように話しかけてみるか、話しかけられたらどのように振る舞うかなど、お互いの腹の探り合いのような状態が続きます。特に本校は大規模校故、前年度同じ学級だった人と再び同じ学級になる確率が低いため、今までに一度も話したことがない人が、結構な割合でいます。休み時間になると、前の学年の友だちと、廊下や階段で、互いの新しい学級の情報を語り合っている姿が多く見られるのも、この時期の特徴です。

親としては、「新しい環境で友だちはできるだろうか」「仲間づくりに乗り遅れ、ひとりぼっちになっていないだろうか」など、心配や不安が募ります。新しい学級での我が子の姿が見えないし、家に帰ってきた子どもの表情が少しでも暗いとなおさら不安になってきます。

ところが、日々の授業や様々な活動を通して、徐々にお互いの性格や嗜好が分かってくる、“波長が合う”者同士が自然とつながってきます。大人数でワイワイと絡み合うことが好きな子どももいれば、少人数でしずかに過ごすことを好む子どももいます。

子どもの社会性は、子ども自らの力で少しずつ育っていくもので、我々大人は、温かく見守り、求められれば相談に乗るくらいの姿勢がちょうどいいのかもしれない。

まもなく始まる“新しい学級”というドラマ、子どもたちに楽しんでほしいと願っています。